

第196回地震予知連絡会重点検討課題について

タイトル「内陸で発生する地震について」

趣旨説明者 島崎邦彦

2011年東北地方太平洋沖地震発生後、当該地震の発生メカニズムや誘発地震の検討に加え、他地域の海溝型地震の予測がどのように変わりうるのか、検討を重ねてきた。しかし、日本社会に大きな影響を与える地震は海溝型地震に限らない。1995年兵庫県南部地震により阪神・淡路大震災が発生し、その後の西日本の地震活動は以前に比べて活発となったようにみえる。海溝型地震に目を奪われ、足下の地震への備えが疎かにならぬよう、今回は陸および沿岸域の活断層で発生する地震をとりあげる。今後10-20年は、東日本、首都圏、西日本のどこを考へても、地震活動が低調のまま推移するとは考えにくい。震源規模はM9に遠く及ばなくとも、都市直下で発生すれば大きな被害となりうる。また、多くの都市の直下には活断層が存在している。

2011年東北地方太平洋沖地震の誘発地震としては、福島県浜通りの正断層の地震（M7.0）をとりあげる。特に、震源となった井戸沢断層、湯ノ岳断層で、どのようなメカニズムの地震が過去に発生してきたかを課題とする。

今回の討議の中心は西日本の活断層で発生する地震であり、南海トラフの巨大地震と関連した内陸の地震活動について簡単なレビューをしたのち、近畿地方の現在の地震テクトニクスを地史から理解することを主な目的として、招待講演と、関連した討議を行う。これに加え、調査が不十分なままとなっている沿岸海域の活断層、短い活断層などを課題としてとりあげ、討議する。